

時代劇の愉しみ方

木場 貴俊

【はじめに―どたばた勝負―】

時間がない。何か書いてほしいと依頼がきたのが、締切六日前。さて、困った。

あれこれ悩んでいたところ、昨年（二〇一八）の一般公開で話した内容でもよい、ということなので、それを中心に書き綴ってみよう。

昨年十一月二三日の日文研一般公開は、東映太秦映画村と長岡京市の共催で「京都と時代劇」をテーマに催された。私はそこで「歴史学研究者が語る時代劇の愉しみ方」というタイトルの講演を行った。近世の怪異について研究をしている私が、何故このタイトルなのかといえ、時代劇好きなのが周囲にバレたからである。

一九七九年生れの私は、同世代と比べると時代劇をよく見ている。必殺シリーズや影の軍団シリーズ、『雲霧仁左衛門』（山崎努版 一九九五）といった、ダークヒーロー、ピカレスク、荒唐無稽な作品が好みで、逆に大河ドラマはあまり見ない。最近も『江戸の牙』（一九七九）のDVDボックスを入手して見たばかりだ。時代劇は、私にとって研究対象ではなく、あくまで趣味にすぎない。だから講演のタイトルも「歴史学を研究している時代劇愛好者が語る時代劇の愉しみ方」が正しかった。

【学生に時代劇をどうぞ】

実は、講演の骨子は、二〇〇九年から大学で行っている講義が元になっている。

時代劇が衰退、あるいは滅亡の危機と言われて久しい。実際、いま地上波で新作を連続放送しているのはNHK（大河ドラマと土曜夕方枠）だけである。「時代劇はお年寄り向き」というラベルが貼られて以降、若年層をターゲットにしていたテレビ局は時代劇を作らなくなった（現在は若年層のテレビ離れが進み、テレビ番組自体が存亡の危機にある）。その結果、時代劇を見たことがない若年層が大半なのが現状だ。だから、時代劇を見て知る「常識」——例えば、町奉行所の同心は黒い羽織を着て左手を持っている——がわからない。さらには、忠臣蔵も言葉しか知らない学生がほとんどである。

そこで、せめて食わず嫌いならぬ、見ず嫌いはやめてもらおうと、講義の数コマを使って時代劇を取り上げている。ここでは、時代劇とは何かを知ってもらい（講演で話した内容）、その上で時代劇と史実を比較している。前者では、登場人物がわかりやすいテレビ版『座頭市物語』やアニメ『佐武と市捕物控』を一話分見せている。後者は忠臣蔵と赤穂事件、寛政の改革（『鬼平犯科帳』）、新吉原などを扱っている（講義一五回全てを使ったこともある）。

【時代劇とは一体何か？】

近代、新劇の対として旧劇と呼ばれた時代物の中から、映像化されたものを「時代劇映画」と称した。映画という当時最先端の文化表現で作られた時代劇は、今なお「現代」の空気や観客のニーズを読み取り、その時代に合った表現作りがなされている。批判があった二〇一二年大河ドラマ『平清盛』の暗めの映像も、デジタル・ハイビジョン化に対して試行錯誤した結果

であった。伝統芸能と同様、時代劇も現在進行形の文化表現なのだ。

時代劇の講義で、まず学生に語るのは、「時代劇はフィクション」、そして「時代劇はエンターテイメント」の二点である。歴史研究者の端くれなので考証の必要性は感じるものの、史実を完全に再現することは不可能だし、そもそも娯楽なのだから荒唐無稽でも構わないと思っている。時代劇に求められるのは、「正しさ」よりも「楽しさ」である。

ただし、フィクション史実、とするならば、時代劇は過去を舞台にした現代劇なのか、という問いも当然出てこよう。私はその問いに対しては、違うと答える。

そこで、時代劇を便宜的に二つに分けてみる。(狭義の)時代劇と歴史ドラマにである。(狭義の)時代劇は、

過去に時代設定がされていても「現代人にも面白く感じる普遍的なテーマ性と作劇法」を持ち、尚かつ「現代を舞台にすると、そのテーマ性を表現することができない」ドラマと定義する。例えば、身分違いの恋や切腹を通した武士の生き様を描くものなどだ。この場合、史実である必要はなく荒唐無稽でも構わない(未来が舞台でも時代劇として成立するが、それはSFと呼ばれる)。むしろ先が読めない展開の方が面白い。『柳生一族の陰謀』(一九七八)や『魔界転生』(一九八一)が好例だ。

一方の歴史ドラマは、「ドラマで再現する歴史」のことで、大河ドラマもここに含められる。もう少し詳しく定義すると、

「歴史そのものが含有している現代人にも面白いテーマ性・作劇法」を表現したドラマとなる。歴史ドラマで重要なのは、最初からネタバレしていることにある。大坂の陣で途中どんなに豊臣方が有利でも最後は敗北するし、坂本龍馬は暗殺される。わかりきった結末までを

如何にドラマティックに魅せるかが、作り手の腕の見せ所である。(狭義の)時代劇も歴史ドラマも現代を舞台にしては描けない。時代劇は、やはり時代劇なのだ。

【あなた、この考証をどう思う?】

最近SNSで時代考証をめぐって盛り上がるのがよくある。少しでも史実と食い違えば炎上騒ぎになる場合もある。ひと昔前の時代劇を見ると、その辺りはルーズで、スタッフには時代考証ではなく「風俗考証」とクレジットされていることが多かった。これは、古く見せるための考証であって、厳密な史実の考証でなくてもよかったからだ。

現在は、大学教授らによる厳密な時代考証が行われている。だから現在の時代劇の方が時代の再現度は高い。しかし、完全な再現は不可能である。そもそも時代劇はフィクションなのだから、肩肘張らずに楽しく視聴すればよい。時代劇を語ることは、歴史を語ることと決してイコールではない。考証とエンターテイメントのバランスは、程ほどがちょうどよい。

実際大河ドラマでも、制作上の都合や視聴者の反応をよくするために脚色がなされている。二〇〇九年の『天地人』で、主人公直江兼統は「愛」の字の宛を被っている。この「愛」は、信仰する愛宕権現もしくは愛染明王の一字に由来しているが、ドラマのテーマは「義と愛に生きた直江兼統」であった(当時の愛は愛執・愛欲などマイナスのイメージで、「愛している」に相当する言葉は「お慕い申し上げる」)。また、二〇一六年の『真田丸』では、豊臣秀吉の政策を一括して「物無事令」と表現していたが、これは中世史家の藤木久志が一九八〇年代以降に用いた学術用語である。話数と放送時間が限られたテレビドラマにおいて、秀吉の政策を一括してわかりやすく説明するための措置だろう。

ちなみに時代考証の対極に位置する作品を紹介しておこう。必殺シリーズ第二作『必殺仕切人』（一九八四）だ。これは仕事人でも活躍した、中条きよし演じる三味線屋勇次をスピノフさせた作品で、京マチ子、小野寺昭、高橋悦史、芦屋雁之助ら大物俳優がキャストイングされている。しかし、舞台となる江戸はトンデモないことになっている。ピラミッドがあったり密林の王者やシャモジ曲げ少年が現れたり、『江戸城の菊』（ベルサイユのばら）が流行ったり…。これもまた歴とした時代劇なのである。

そもそも歴史研究は、現代とは異なる常識を持った世界を知ること、過去という異文化との交流に他ならない。時代劇も海外ドラマを見るような心持ちの方が楽しめる。

【国境無用】

いま地上波では昼や夕方々に時代劇の再放送をしていない（UHF局は除く）。しかし、衛星放送やCSでは旧作が毎日放送され、新作も少なからず制作されている。これらの一番の視聴者はシルバー層だ。一方、時代劇はネット配信もされている。テレビ離れが進んでいる若年層が偶然見てハマる可能性もゼロではない。時代劇は、世代を超えて楽しまれてきたが、それは基本的には変わっていない。若年層はこれからも時代劇を一コンテンツとして触れていくだろう。時代劇好きな若い人たちも少なからずいる。

とはいえ、新作が作りづらいつらいつらという意味で、時代劇は現在苦境に立たされている。これについては、春日太一『なぜ時代劇は滅びるのか』（新潮社、二〇一四）に詳しい。『斬』（監督塚本晋也、二〇一八）のような快作も作られているが、単発の映画ではないテレビの連続ものは現在NHK以外では作られていない。そもそもお金のかかる時代劇に対して、今の番組制作予

算は削られる一方である。作られなければ、視聴されなし、スタッフが培ってきた技術や知識の継承もままならず、作ること自体もそのうち困難になる。負のスパイラルである。

しかし、世界に目を向けると時代劇は新たな局面に入っている。近年、日本で作られたものと遜色ない時代劇が海外でも作られているのだ。『沈黙―サイレンス―』（監督マーティン・スコセッシ、二〇一六）や『KUBO―二本の弦の秘密―』（監督トラヴィス・ナイト、二〇一六）などが、その代表だ。時代劇に理解のあるクリエイターが、潤沢な海外資本を使って、専門のスタッフや日本人役者を雇用して作っている。つまり、日本でなくても日本の時代劇を作ることが可能になっているのだ（『バシフィック・リム』が歴とした「怪獣」映画だったように）。ここに時代劇作りの活路があると思う。海外資本と提携して、本格的な日本の時代劇を作ればいいのだ。長期間雇用・拘束し、役者にみっちり演技指導を、スタッフに技術を仕込む。時代劇が生き残る現実的な方法だと思うのだが、どうだろうか。

【おわりに―語りて候―】

これまで好き勝手に書いてきたが、言いたいことはただ一つ。時代劇は面白い。

できれば、その面白さを知っている人は、他人にも伝えてほしい。時代劇が存続するためには、まず興味を持つことが大事。良くも悪くもSNSはそのために便利なツールだ。はじめは自分が楽しみ、そして同好の士を増やすこと。初心者には優しく手解きを。まずはそこからだ。

（附記）

（狭義の）時代劇と歴史ドラマの区別は、作家の京極夏彦さんとの会話から導き出されたものです。この場を借りて御礼申し上げます。また、各見出しは、必殺シリーズのサブタイトル

にちなんでいます。どのオマージュかわかってもらえると、少し嬉しいです。
まずはこれまで、あらあらかしこ。

(国際日本文化研究センタープロジェクト研究員)